

# きつねものがたり

作 小野小町

## ●登場人物

長姉

次姉

妹（大きな尻尾がある）

お嬢さん（老婆）

一 きつねの嫁入り

舞台には何も無い。

尻尾が見える女の子(妹)が歩いている。口ずさみながら…。

妹

…雨…晴れ…雨…晴れ…。母ちゃんはこう言った。お天気なのに、雨が降る…。きつねの嫁入り…。きつねの嫁入り…。母ちゃんの嫁入りも…晴れて雨が降っていた…。だから…きつねの嫁入りだ…。きつねの嫁入りだ!!

光がさす。狐の嫁入りか？着物姿で登場する女(次姉)。

次姉

晴れても雨で雨でも晴れ！なんて素晴らしい天気！これから一緒にしろって人ときつねの嫁入りなんて！そうだよ、これから一緒に生きていこうって人と、ああきつねの嫁入りだ。人生、晴れた日ばかりじゃないよ。雨もどさんと降るだろう、雪もどさんと降るだろう。晴れて雨、雨で晴れ！人生うまくできている。きつねの嫁入り、いいじゃないか！

不思議な踊りをしながら去って行く。

二 三姉妹の棲み家

木箱が一つあるような何も無い空間。妹が帰ってくる。

妹

きつねの嫁入り…きつねの夫婦が子どもを産んだ…。あたしは…きつね…。あたしはきつね…。…ただいま…。

長姉

おかえり…。

次姉

…あんた…その尻尾、どうして隠せないのよ！

長姉

この子はまだ小さいから、うまく隠せないんだよ。

次姉 ……そんなもんぶら下げて学校なんかに行ったら、あんた、保健所につれて行かれて殺されるよ！  
妹 ……かなしいと……尻尾が出る……。  
次姉 け！あんた、この間、嬉しいと尻尾が出るって言ってなかった？！  
妹 うん。だから、家に帰ると姉ちゃん二人に会えて嬉しいから、尻尾が出るんだ。  
次姉 いいかい？この尻尾はね、命に関わる尻尾だよ……。  
妹 うん、母ちゃん言った。山の中を走る時に役立つて。  
次姉 今はこんなもの、なんの役にもたないんだよ！……今日は何回……やられたんだ……。  
妹 ……大丈夫……。  
次姉 やられたら……やりかえせ！  
妹 ……やりかえす……。そんなことより……悲しくて……悲しみをこらえないと……尻尾が出てしまうから……  
……そしたら、だめって姉ちゃん言うてるから……悲しみを我慢するんだ……。  
次姉 ……くそったれ！！  
長姉 ……食べるかい……？（干からびたお菓子のようなものを出す）  
次姉 ……もつとまともなもの食べたいわー。お肌が悪い……。  
長姉 ……昔はもつとお供えしてくれただけどねえ……。豆腐屋のおじさんが、朝一番、できたばかりの油あげを供えてくれたもんさ。  
次姉 ……け！昔の話したって、お腹はふくれないのよーあああ、こんな間抜けな姉と妹の間にいると……  
長姉 ……夜に鳴くと子どもがこわがるよ……。  
次姉 けっ！いい、姉ちゃん。子どもは夜中までラインで忙しいんだ、あたしらの声が聞こえるわけない。  
長姉 ……なんだい。そのラインってのは。  
妹 友達と話すんだって。  
長姉 え？子どもが夜中までどこで話すんだい？どの家ももう寝てるだろう？  
次姉 ああもう……姉ちゃんの時代錯誤、じれったいっただけありやしない！いい？ラインってのはさ、スマホで話すんだよ。

長姉 ……スマホって家があるのかい？

次姉 ……家……けけけけけ…。スマホが家だって！

妹 昼も夜も友達同士、ずっと話すんだって。

長姉 昼も夜も？そんなに何を話すんだい？

次姉 ……元気—とか、何食べた—とか。ひま—？……るっせえんだよ。

妹 ……でも……話したいな…。あたし……話したいよ、みんななど。

長姉 毎日、顔合わせてるんだ、きちんと挨拶してるだろ？

妹 うん。でも……挨拶してくれない……。

次姉 あんたさ……こ—んこ—んこ—んこ—ん……なんて鳴いてんじゃないの？

妹 スマホ買ったら、話してくるって。ラインに入れてくれるって。

長姉 ……よくわからないね……顔を見ているのに挨拶してくれなくて、何か買ったら話してくれるのかい？

次姉 買ったら話してくれるよ！お客様、本日はこれとそれとあれがお安くっております。お金を持っ

長姉 ……てたら、いくらでも話しかけてくれる！

次姉 ……そういうことか……。

長姉 やつとわかった？！姉ちゃん！

次姉 ……でも……わからない…。昔は何もなくても皆、お供えをしてくれたじゃないか。

長姉 ……あのさ……姉ちゃん、こんな町の外れの崖下の日の当たらない、誰も見ることもない小さなお稲荷

次姉 ……さんに、誰がお供えしてくれるっていうのよ！賽銭、投げてくれるっていうんだ！

長姉 ……古い古いお稲荷さんって、母ちゃんいつてたよ。

次姉 ……古くて汚い……なんていいとこ一つもない！……いい？世の中、戦略、マーケティングが全て！あのお稲

長姉 ……荷さんの裏には……「美人きつね三きょうだい！」がいるって……！団子三兄弟にはるかに負けるこの

妹 ……顔、このスタイル、このやる気のなさ！

次姉 ……母ちゃん、言ってたよ。まあぼちぼち、いつも通りにねって……。きつねの嫁入りだよって。

妹 ……母ちゃん……死ぬ前にそう言っただね……。

次姉 ……きつねの嫁入りか……。晴れているのに雨が降ってる……。そんな天気、最近見たこともない……。仕

事……言ってくる……。(去る)

長姉 ……苦勞さん…。(末妹に)…お前…大丈夫かい？…嫌なら…学校、行かなくていいんだよ。  
妹 ううん、母ちゃん、勉強するのは大事って言ってた…それに…あたし…みんなと…友達になりたい…。話がいつばいしたい！

暗転。

三 月夜に旗を持って

月夜のような。

ベビーメタルの「イジメ、ダメ、ゼッタイ」が大音量で流れる中、次姉、登場し、舞台で跳ねる。

次姉

世の中、どこも頭打ち！だから頭を打って打って忘れよう、ニッポン！頭打ちニッポン！笑うしかないニッポン！はしゃぐしかないニッポン！前に前に進めよニッポン！掛け声スローガン、いいぞニッポン！愛か夢か希望か！未来の言葉にあふれたニッポン、それって気持ち悪くないかニッポン！光の裏には影がある、影の美しさを愛したニッポン、月の影、あそこに兎がいたよとそれもニッポン、あの兎の姿を誰ももう見ないのかニッポン、月の裏側がハイビジョンカメラで、はつきりくつきり映されて、大喜びのニッポン。全てを科学の目でさらして拍手喝采か！月の影に兎がいたのだよニッポン、あの兎をもう見ないのかニッポン…。想像したまえニッポン、光の裏の影を。兎の跳ぶ月の影を。人の生きる光と影を。影から見えるまことをニッポン！…

座り込む次姉に蒼い光が。

次姉

いい月だねえ…母ちゃん…。月見ると、お稲荷さんに供えてあったお団子を思い出すよ。あのお団子はきつと、お月見のお団子のお裾分けだねって、母ちゃん、あたしの口に入れてくれた…。おいしかった…。あんまりおいしくて…コンコンコーンって鳴きたくなった…。

スマホがなる。

次姉 はい、こちら「女狐」。わかりました。斜め前のホテル：十三号室に、もう入ってるんですね、お客さん……。

次姉、去る。  
妹と長姉のいる、朝の様子。

#### 四 初めての友

長姉 ……どうしたんだい？学校、行かないのかい？

妹 ……ううん、行きたい……けど……。

長姉 ……その尻尾じゃ……行けないか……。悲しすぎて……我慢できないんだね……。

妹 ……悲しいんじゃない……その反対！

長姉 どういうことだい？

妹 あたしの尻尾は、ものすごく悲しかったり、ものすごく嬉しかったりすると、こんなに出たままになるから、いつもあまり悲しくないように、あまり嬉しくないように……してた。

長姉 ……がまんしなくていいよ。笑って泣いて、好きにしたらいんだ。尻尾があったって、いいよ。だいたい、お前の尻尾はきょうだいで一番立派だ。

妹 そうなの？……そういえば……姉ちゃんたちの尻尾……見たことないな……。

長姉 ……ずっと隠していると、尻尾出すのも面倒なんだ……。

妹 ふうん……。でも姉ちゃん、この尻尾、誉めてくれる人がいたよ！

長姉 え？

妹 友達！

長姉 友達って……スマホで話すっついう？

妹 違う！学校の友達じゃなくて……学校に行く途中、ほら、丘の上に大きな家があるだろう？

長姉 ……ああ……。

妹 そこに一人、お嬢さんが住んでいて……。

長姉 ……お嬢さん？

妹 うん、そのお嬢さん、窓から手を振ってくれる！（手を大きく振る）  
長姉 ……確か、あのお屋敷は…。  
妹 ……ゴミ屋敷…。…みんなそう言うよ…。でも…そうでもないんだよ。本もレコードも…オルゴールまである！

幕が開くと、奥に、手を振る「お嬢さん」がみえる。  
妹はその「お嬢さん」の元へと向かうのだ。

妹 ……初めてのあいさつは、初めてだから…コココココンコン！違う…はじめまして…はじめまして！  
…尻尾…だめだ…尻尾、喜んじゃだめだ！隠れてよ…隠れておくれよ… あたし…もっと近くに…あの人の…もっと近くに行きたいよ…。だって…手を振ってくれたんだ…あたしに…初めて…挨拶してくれたんだ！

五 お嬢さんのもとへ

「お嬢さん」の部屋は古物と本に埋もれている空間。  
その「お嬢さん」布を巻きつけたような風体で、良く顔が見えない。  
少し、距離をとりつつ、妹は「お嬢さん」を前にそわそわしながら、

妹 はじめまして…あの…あたしは、あすこのお稲荷さんの裏に住んでる…きつね…うどんが好きな…えっと…きつちゃん…きつちゃんと呼んで下さい。えっと…あなたは…。

「お嬢さん」、古い本を差し出す。中には手紙が挟まれていた。

妹 ……手紙…？…お嬢さん、いつまでも笑っておいでください。僕はお嬢さんが笑っていられるよう、お嬢さんが美しい声で、本を読んでくださった…その美しい声を…美しい日本の言葉を…僕は忘れず、お国のために…戦って参ります！お嬢さん、本を…本を読んでくださり……ありがとうござい

いました。そうか…お嬢さん…？お嬢さん…っていうんだね。あ！

「お嬢さん」が妹の尻尾を手にして、自分の頬を寄せた。驚く妹。

妹

あたしは…その時…とても不思議な気持ちになった…。尻尾を見せて驚かない人に出会ったから。…悲しすぎて…嬉しすぎて…出てくる尻尾…。だから、外に出る時は…学校に行く時は、悲しくも嬉しくもないように…気をつける…。でも…今日はとても嬉しくて…嬉しくて嬉しくて、だって、あたしに、姉ちゃんたち以外にはじめて！…手を振ってくれた…手を振ってくれる…友達…！…だから嬉しくてとても尻尾なんて！…隠せやしない…。ありがとう、お嬢さん…ありがとう、友達…！

「お嬢さん」、一冊の本を妹に渡す。

そこにはきつねの絵が。

妹

うそ！…本には…きつねの絵があった…『手ぶくろを買いに』…。手袋…。…きつねの子どもが…手袋を買いに、町に出かけます。こっちがきつねの手。こっちが人間の手…。きつねのおかあさんは、こう言いました。「決して、こっちの手を出しちゃいけないよ、こっちの方、ほら人間の手の方をさしだすんだよ」

離れた場所で、長姉が絵本を読む姿が見える。

長姉

「このお手々にちょうどいい手袋下さい」すると帽子屋さんには、おやおやと思いました。狐の手です。狐の手が手袋をくれと言うのです。これはきつねの木の子葉で買いに来たんだなと思いました。そこで、「先にお金を下さい」と言いました。子狐はすなおに、握って来た白銅貨を二つ帽子屋さんへ渡しました。帽子屋さんはそれを人差し指ひとさしゆびのさきにつけて、カチ合せて見ると、チンチンとよい音がしましたので、これは木の葉じゃない、ほんのお金だと思いましたので、棚たなから子供用の毛糸の手袋をとり出して来て子狐の手に持たせてやりました。（新見南吉『手ぶくろを買いに』より）」



妹 ……あたしは本当にびっくりした…姉ちゃんが勉強するんだよって、言っただのがやっとわかった…字が読めて良かったよ！だって…そのお話は、狐の手でお金を渡しても、ちゃんと、手袋が買えた…お話だったんだ…ああ、ほんとに…そうなんだ…ここは…尻尾があっても…いい場所なんだ…。

## 六 友達の正体

妹、走って家に帰る。三姉妹がそろそろ。

妹 友達！！

次姉 ……また！あんたはどーして、そう無邪気に尻尾見せてんのよ！！

妹 ……嬉しくて…尻尾なんか隠せないよ、姉ちゃん！

長姉 ……そんなに学校楽しいのかい…。

妹 ……学校なんか…いかない…。

次姉 出た！不登校！いいね、やっと姉ちゃんの気持ちわかった？お前がそういうのを待ってたんだ！

妹 ……姉ちゃん…もういいよ。ここから出よう…離れよう…。

妹 ……どういふこと？

次姉 だから！こんな誰も何も供えてもくれない、賽銭もくれない、しみつたれた稲荷を捨てて、逃げんだよ！

妹 ……嫌だ…。…ここがいい…。やっど…やっど…あたし、尻尾が…尻尾があってもいい人に出会ったんだ、姉ちゃん…！尻尾、隠さなくてもいい友達に…会えたんだ、姉ちゃん！

次姉 ……けけけけけけけけ！友達聞いてあきれね…あんな汚ねー、婆さんと友達なんてさ！

長姉 ……婆さん…。

妹 婆さんじゃない…お嬢さんだ…。

次姉 ……ばばの婆さん！！

妹 ……ばばの婆さん！！

二人、つかみあいのケンカとなる。

妹

…婆さんでも…お嬢さん…なんだ…。お嬢さんは…ずっと…お嬢さんって呼んでくれる…手紙と…いつも一緒なんだ…あれはきつと…。

次姉

恋人の手紙…。

次姉の一人芝居が始まる。

次姉

こんなろくでなしの姉と妹を持つと…その真ん中にいるかわいそうな姉であり妹である私は、こやつらを食わせていたために、七転八倒するわけでごんすよ。ああ、上と下に挟まれて、哀れ哀れなわたくしは…どんな仕事も…ええ、どんな仕事だってえ、やるんでえ…ごんすよ！（電話に出て）はい、こちら女狐！声をかけられりゃあ、一緒に寝ましょう！世の殿方はとっても寒い、寒くて寒くて仕方ないってねえ！だから、私にくるまれば、とっても！いい、いい、いい、気持ちいい…ってのたうち回ってさあ！いや…そうでもないか…くそつたれ、くそつたれ、くそつたれ！って…。いいおっさんが、面と向かってくそつたれて、言えないのかよ、ばっきやろう！こんな仕事は疲れるから、でもかわい姉と妹のために、あたくし、仕事をするんでごんす。（携帯ベル）ほおら、来た！はい、こちら、女狐 探偵事務所！はい、何でも致しますよ、なにせ、私、ここいらあたりで、一番古い、お稲荷さんが住まいにて、このあたりのことなら何でも！はい、は？ああ、丘の上にあるあの、ゴミ屋敷でございませぬ。（おまじないを始める）女狐の力で…お調べいたしまーす！ 証言①近所の主婦「困るんごんす！ここはハイソでエレガントな、高級住宅地ごんす。あれがあるだけで、ランクが下がるんごんす。それにまあ、物騒で。金目の物はもうほとんど盗まれて、今あるのは、古い本ばかり。お金にもならない古本に囲まれて、ばあさんが、ただ一人、ここにこ笑ってるっていうんでごんすよ！ああ、気持ち悪い！

妹

気持ち悪いのは、お前じゃないか！若い子と同じかっこうして、エステにはつか通って…くそつたれ、アンチエイジングばあ！

次姉

お！いいねえいいねえ！友達ってのは、別の力を与えてくれるのかねえ！

妹 友達を守るのが……友達だ。

長姉 ……いいお屋敷だったよ、あすこは。

妹 姉ちゃん、知ってるの？

長姉 お前たちはまだ生まれてなかったからねえ……。母さんと、あのお屋敷の近くまでよく散歩にね。

妹 母ちゃんと……散歩……。

長姉 お月さんを眺めながらね……。そしたら、ふわふわのベッドに小さなお嬢さんがいて、本を読んでもらっていたよ……。それは狐のお話で……。母ちゃんと二人、どきどきしながら聞いていた……。お話は……。こんな言葉で終わっていた……。……「ほんとうに人間はいいものかしら」……。

妹 ……それ……。それだよ、お嬢さんが読んでくれた本！

長姉 小さなお嬢さんも大きくなり……。恋をした……。けれど、その恋人は……。戦争に行つて帰つて来なかった……。それから……。お嬢さんは家から出なくなり……。

妹 父母が亡くなり、一人ぼっちになつても、ただ一つ、恋人が残した手紙を胸に……。今も生きているんで……。ございます……。信じらんない……。馬鹿じゃねーの。

次姉 ……友達は……。馬鹿じゃない……。違ふよ、きっと……。今も……。その手紙と話してるんだ……。……お嬢さん、いつまでも笑つておいでください。僕はお嬢さんが笑つていられるよう、お嬢さんが美しい声で、本を

読んでくださつた……。その美しい声を……。美しい日本の言葉を……。僕は忘れず、お国のために……。戦つて参ります！お嬢さん、本を……。本を読んでくださり……。……ありがとうございます……。そうだよ、お嬢さんは、死んだ人に……。今も本を読んでも……。言葉を……。かけてるんだ！

妹 ……それで……。幸せ……。つてか？

次姉 うん！

妹 ……死んだものに本読んで、声かけても何の特にもならねーよ！死んだものが……。何してくれらつて

次姉 ……うんだ！

妹 ……してくれよ！……。母ちゃん！……。だつて……。母ちゃん……。死んでも……。母ちゃんのこと、思い出すと……。嬉

しいし、元気になるよお！（泣く）

長姉 ……人間は……。……「ほんとうに人間はいいものかしら」……。母ちゃんは私に、最後、こう言った……。本

当にいいものか、最後までお前は見届けるんだよ、それが、この土地を守つてきた……。お稲荷さんのおつとめだ……。

おつとめだ……。

おつとめだ……。

おつとめだ……。

おつとめだ……。

おつとめだ……。

おつとめだ……。

おつとめだ……。

次姉 …ひどいよな、母ちゃんは…。あたしには、姉ちゃんと妹を頼むよって…。いや…。あたしをこんな  
に頼りにしてくれるって…。嬉しかったよ、母ちゃん。ああ、あたしはこの間抜けな姉と妹のためな  
ら、なんだってするって、母ちゃん、それは今だって…。嘘じゃないよ…。けどね…。今の人間につきあ  
うって、覚悟いるよ！こいつだって、悲しすぎないように…。嬉しすぎないように…。尻尾が出ないよ  
うに…。我慢してる…。そんな我慢は…。母ちゃん…。もう限界なんだ…。もう誰も…。町の外  
れの崖下の、小さなお稲荷さんに…。花を手向ける人なんて…。誰も…。いない…。

七 言葉が燃えて歴史も消える

燃える音がする。

三人 え？！

次姉 …臭う…。

妹 臭う…。

長姉 臭う…。

三人 火のにおい！

妹 お嬢さん?!!(向かおうとする。)

次姉 だめだ…もう無理だ…!

長姉 …風が吹いてる…。よく燃えるよ…。

次姉 …何言ってるの、姉ちゃん…。

長姉 …いけないものは…。消されるんだよ…。

次姉 …まさか…。誰か…。誰か火をつけたのか?!

長姉 …火は飛び火する…。こっちにくるよ!!!

長姉、妹たちをかばう。

三人（火がやってくる）わー！！

次姉 けけけけけ！そういうことか！汚くて古いものに火をつけて、燃やしてしまえ！そういうことか！

き …お嬢さんの本も…お嬢さんの手紙も…お嬢さんの言葉…きつねの言葉も…燃える…燃えるよ！！

長姉 …「ほんとうに人間はいいものかしら」…。

次姉 なわけないだろー！！こんなに火をつけて…なんでもかんでも燃やすあいつらが…！

長姉 …だって…あれはいい本だよ…燃えてしまうのはもったいない…。…待っておいで、取ってきてあげるから。

次姉・妹 姉ちゃん？！

長姉 …人間は…いいものかしら…。母ちゃん言ってたよ、それは…半分…半分、人間の…お前たちしかわからないだろうって…。

次姉 …半分…人間…?!…どうということ…どうということ…?!

長姉、火の中央へ突進してゆく。

次姉・妹 姉ちゃんー！

燃えさかり崩れる音。

暗転。

ハ ヒトもキツネも…どこへゆこう

きつね（妹）、廃人のように動かない。

次姉

いやあ、びっくりしたねえ。あの座っているだけの、家から出たことない姉ちゃんが、渾身の飛躍、跳躍、ジャンプでござんすよ！コーーンって、真っ赤な…真っ赤な 夕日に向かって突進する、姉ちゃん！！…全く、夕日でないのが残念でござんす…。あの広大な本と、言葉の詰められた古い古いお屋敷が真っ赤に燃えるその中に…我らの偉大な姉様は…突進していったのであります…！！

「海ゆかば」が聞こえる。

次姉、声なき咆吼を続ける。

やがて、何も反応しない座り込む妹に近づいて

次姉

…お前、いつまで座ってるの。あー、腹減った！姉ちゃんのかわりに、あんた、飯、作ってよ。それにしてもまあ、よくもここまで燃やしてくれたね。お稲荷さんの形もないよ。…反応無し…。(おまじない)…だめだ…。あたしじゃ、だめだ…。(顔を覆う。泣いているのか)姉ちゃん、そろそろ復活してよ…。

すると長姉、上から下までまるでミイラのような出で立ちで登場。

次姉

…ごめんね、姉ちゃん…病院行く金もないからさ。あたしが適当にオロナイン、塗り込んでお手当したもんだから…こんな格好で…ごめんねえ、姉ちゃん！…姉ちゃん…ありがどうね、生きててくれて…大好きだよ…姉ちゃん…。

長姉、動かない妹の方を見る。

次姉

…そうなんだ、姉ちゃん…こいつ…生きてるけど…死んだままだ…生きてるけど…死んでたらだめだ…いろいろさあ、思いつく限りの「きつね」のおまじない、やってみただけど、全然だめだ…こいつ生きてくれないよ、このままじゃ…。え？とっておきの、きつねのおまじないがきくって？…

「たましひは…尾にこもるかな？！！(前登志夫短歌)」

次姉は歌を口にしながら、姉妹三人の手をつないでゆく。そしておまじないのように、前登志夫の「尾」の歌を叫ぶ。

次姉 「たましひは尾にこもるかな草靡く青草原に夕日しづめる」(前登志夫『繩文紀』より)

雷のような光や音の中、次姉はさらに歌う。

次姉 「たましひは尾にこもるかな草靡く青草原に夕日しづめる」!!

放電のような光が。三人は倒れる。

しばらくして、次姉のみがゆっくりと目覚め、これまでとは違った口調で語り始める。

次姉 …きつねものがたり。一匹のオスのきつねは、美しいものを見ました。それは、花嫁行列でした。

美しいお嫁さんが、隣村まで花嫁行列。晴れて雨が降って、きつねの嫁入りだと声がしました。

一匹のオスのきつねは恋をしました。それは小さな少女です。少女にも不思議ときつねの声が

わかり、どうにも離れづらくなり…少女は山の奥へと消えた…村の人たちは、きつねにだまされた、きつねに連れていかれた…と言ったそう。

ミイラのような長姉の体がゆっくりと動き始める。

続き、妹が目覚める。

妹 …きつねものがたり…ふうん…そうやって、あたし、生まれただ…。

次姉 げっ!! さすがだ、姉ちゃん! こいつ、復活したよ!!

妹 …遠野物語の中に、よく似た話があるよ。家で飼っていた馬があまりに大事で好きになって、

一緒になりたいと娘は言った…。百年以上前の、民俗学者、柳田国男の聞き書きだよ。

次姉 …なんか、こいつ…復活して、頭良くなってる…良かったな…。(感極まって妹を抱き、声なき声で泣く)

妹 (なぜか口をついて出たように) …お嬢さん…。

次姉 (一瞬、ざわっとした表情になるが…) さあさあ、ぼろぼろの一番上の姉と、何もかも忘れて賢くなった、末の妹、

まともなのは、私、真ん中の姉だけでございます。さ、こんな、焼けこげた稲荷からはおさらばするんでござんす！行くよ！！

妹 …「ほんとうに人間はいいものかしら」…。

二人の姉は、この妹の言葉をどんな顔をして聞いているか…。  
しかし、妹は…何かを信じるように言葉を続ける。

妹 いい言葉だね。姉ちゃん！

ベビーメタルの「イジメ、ダメ、ゼッタイ」が流れる中、ゆっくりと光が落ちてゆく。



●執筆年 2015年(平成27年)3月～4月

●上演記録

初演：第七回奈良演劇祭プロデュース「きつねものがたり」

2015年(平成27年)5月31日 奈良県王寺町やわらぎ開館イベントホール

再演：小町座10周年企画「お、あるひとへ」第一部「きつねものがたり」(第二部「父のうた母のうた」)

2017年(平成29年)7月22日 奈良市ならまちセンター市民ホール

●引用作品

新見南吉『手袋を買いに』

前登志夫『縄文紀』

●作者連絡先

小野小町(おのこまち)

[komachi.office@gmail.com](mailto:komachi.office@gmail.com)